

三界飛脚

後編

村上元三



三界飛脚

後編

村上元三



三 界 飛 脚 (後)

昭和三十四年四月二十六日 印刷
昭和三十四年四月三十日 発行

定 価 二七〇円
地方売価 二八〇円

著 者 村 上 元 三

発 行 者 佐 藤 亮 一
東京都新宿区矢来町七一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表七一〜九
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・東光印刷株式会社

製本・新宿 加藤製本所

© by G.MURAKAMI 1959 TOKYO Printed in Japan

目

次

戰場勘定	七
天草丸	六
二月二十八日	五
蟬しぐれ	四
二百六十人	三
遊俠往来	二
雁のたより	一
キリシタンの宝	二
片鱗槍	一

めかと算盤	二五九
恋と意地	二七〇
熊鷹の爪	二七四
黒い風	二〇八
ポルトガルの旗	二三三
闇に鉄砵	二三七
恋飛脚	二五四
宝　　船	二七二
人それぞれに	二八三

装
幀

宮
田
重
雄

三
界
飛
脚

後
編

戦 場 勘 定

備後福山十万石の城主水野日向守勝成が、天草の戦場へ到着したのは、ようやく二月も二十二日になったときであつた。

すでに日向守の嫡男美作守勝俊は、先に戦場へ着いて、松平伊豆守の本陣の右翼、丘から畑地へおりたところに、水沢瀉の紋のついた幔幕を引きめぐらせ、陣を備えている。これまで水野勢が、あまり積極的な攻撃を原ノ城へ加えず、むしろ松平伊豆守の本陣を守るような形でいたのは、日向守勝成の下知によることらしい。

水野日向守勝成は、ことし七十五歳だが、まだ嫡男の勝俊に家をゆずらず、戦場往來のころの倅をそのまま残しているほどの元氣さであつた。もともと大名の子に生まれながら、変名をして諸国を巡り歩き、ほうぼうの戦場で功名を立てて父の後を継いだ。大坂夏の陣ではめざましい働きをして、徳川家康から大和郡山の城を賜わり、のちに西海道の鎮守として福山城主にされた人物であつた。

この天草の戦いに、老中松平伊豆守信綱が上使として派遣されるとき、將軍家光は、何事も水野日向守に相談をす

るように、と言つたという。それを耳にしながら、わざと戦場へおかれて到着したのは、日向守にも何か考えがあつてのことに違ひないし、また伊豆守としても、いまさら老武者の日向守に戦術の指揮を仰ごう、などという氣もないのであろう。日向守がなかなか天草へ来ないことについて、水野家へ催促する様子は少しもなかった。

しかし、水野日向守が二十二日に戦場へ到着してから、二十四日に伊豆守信綱の本陣に寄手の諸將が集められ、評定が開かれた。

その前の二十一日の夜、城兵四千ほどは、四手に分れて原ノ城から突撃し、寄手の仕寄場の黒田、有馬、鍋島などの諸陣を攻めたが、城方は三百ほどの討死を出し、寄手は併せて二百人に近い戦死者があつた。

二十二日の朝、松平信綱は、城方に攻められた陣地を巡視し、敵の討死した者の腹を裂いてみたというが、その結果は、まだ寄手の陣屋へは伝えられていない。

ただ、城方の戦法が積極的になつてきたのは、はつきりと寄手にもわかることであり、水野日向守が戦場へ到着したとなれば、寄手の総攻撃の時機が近づいてきたのは明らかであつた。

二十四日の評定が始められたとき、松平信綱はあまり口を利かず、戸田左門氏鉄が、日向守勝成を含めた寄手の諸將へ、將軍から授けられた下知を改めて告げた。

敵は百姓たちゆえ、味方の兵をあまり損じてはならぬ、

城を遠巻きにして敵の勢いの衰えるのを待ち、兵糧の尽きるまで遠攻めにすべし、というのが將軍はじめ幕閣の意見であった。

髪の毛の白い、赤ら顔の、七十五歳とも見えぬ勝成は、黙って氏鉄の言うことを聞いていた。

松平信綱も、無言のまま、ほかのことを考えているような顔つきであった。

「敵は百姓たちの集まりとは申せ、戦さの下知するは浪人。ことにキリシタンの教えに凝り固まつたる者たちなれば、死をおそれず、一気に城を攻めては寄手の人数を無駄に損ずることになり申すべし」

と戸田氏鉄は、言葉が続けた。

諸將のうち、城方の不意討で苦しめられた大名も多いので、今さら氏鉄から同じことをくり返して聞くまでもない、と思うからであらう、鍋島信濃守勝茂などは、いやな顔をして横を向いている。ことに、二十一日に敵の夜襲を受けたとき、鍋島勢は死者三十三人、怪我百十人を出しているだけに、なおさらのことであった。

「しばらく」

と水野勝成は、手を上げて戸田氏鉄の言葉をさえ切った。

「遠巻きにして味方の兵を損ぜず、敵の勢いの衰えるを待つ、というは上策なれど、今日が日まで百日に及び、公儀の下知を受けたる諸將、いかに要害とはいえ、原ノ城一つを

落せずにあるとあっては、天下の物笑いとなり申すべし。こたびの大将、松平豆州どのの存念をお伺い仕りたい」

大きな声でいって、伊豆守信綱のほうを見た。

こういうことを水野勝成から訊かれる、とは信綱も覚悟をしていた。オランダ船を頼み、海上から砲撃させたのも大した効果はなく、寄手の中でもよく言わぬ大名があるし、城方からの矢文にもそのことを罵って書いてあった。

海上からの砲撃は、あまり原ノ城に被害を与えなかったものの、陸上に備えた五門の大砲は、平戸のオランダ商館長ターケバッケルの指揮を受け、城壁に接近して射撃を加えたので、原ノ城の本丸、天草丸、一の丸、出丸などに火災を起させ、城方の犠牲者も相当に出たようであった。

しかし、水野勝成にも、異国人の力を借りたとは何事か、という肚があるし、信綱のやり方には反感を持っているらしい。

すでに信綱は、先月二十七日にオランダ船の砲撃をやめさせ、ターケバッケルもオランダ船も、平戸へ帰している。

「ただの百姓一揆にてはこれなく、敵の勢いも強く、攻め難い城、とおのおののご承知の如く」

色の黒い顔に、細い眼を開け、伊豆守信綱は口を切った。

この月の十日、金堀人夫を集め、城内への坑道を掘らせて、城方に見破られ、原ノ城の中からも坑道を掘ってきて、松葉でいふし、汚ないものを投げ入れる、などという逆襲を加えられて、その地下攻撃は失敗に終った形であった。

だから伊豆守としては、全軍の不満がことごとく自分に集中している、とよくわかつていたし、水野勝成の肚の中も、ちゃんと承知をしているのであった。

「おのおの方も、すでにおわかりと存ずるが」

と伊豆守信綱は、諸將の視線を一つに集めながら、それも氣にならぬような、ふわっと取りとめのない表情で、言葉が続けた。

「二十一日の敵の夜討は、食糧を手に入れようとするのが敵の最も大きな目当てにて、敵の残したる死体の腹を裂いてみたところ、胃の腑の中には草のようなものが僅かに入っているのみ、とそれがしがこの眼で見とどけてござる。腹が減つていては、いかにクリシタンの教えを守つたりとて、戦う力はござるまい。味方を損ぜぬように城へ総攻めをかける機、近づいたりと存ずるが、この饒いかが」

ぐるりと諸將の顔を見まわすうち、細川越中守忠利と鍋島信濃守勝茂の二人が、同時に膝を進ませた。

どちらも原ノ城に近いところに仕寄場を設け、これまで何べんも敵の夜襲を受けて、討死や怪我人を多く出しているだけに、諸將の中でも最も戦闘精神の盛んな大名であった。

「われらが陣は、城に近きところにござる」

と鍋島勝茂が、信綱のほうへ向つて、

「まず細川どのと二手にて出丸を攻め、城を落してごらんに入れ申すべし。かたがたは、一時にときの声をあげ、勢

いを添え下さるようお願い申す」

それに続いて、細川忠利も一礼した。

諸將が顔を見合わせ、松平信綱も何も答えぬうち、水野日向守が声を張つて答えた。

「鍋島どの細川どのの申さるるように致しては、これだけの大名、ただ戦さ見物のため天草に集まつたことに相成るべし。それがしもこの年まで、むかし大御所様に従い参らせ、初陣仕つたる十六歳の時より大小の戦い五十余度、人におくれをとりたることもなけれど、抜け駈けの功名仕つたる覚えもござらぬ」

また水野勝成の自慢話がはじまつた、と思ひ、顔を見合わせる大名もいたが、勝成は、一だんと声を張つて、

「今日の評定は、竹釘いくさというものにて、頭たる者は無きに似たり。追討の上使として松平豆州どのがおん下知あらば、何びともそれに背くこと不忠と相成り申すべし。いかが、伊豆守どのがおん下知は」

年長であり、ことに戦場におくれて到着したのは何か訳があるのではないか、と思われている水野勝成だけに、鍋島勝茂も細川忠利も、黙り込んでしまった。

水野勝成は、天草の戦場に着いてからすぐ、はじめの上使の板倉重昌がなぜ討死をしたのか、その原因がわかつたようだし、これまで百余日、寄手が原ノ城を攻めあぐねているのが何故か、見抜いたようであった。

これほどの大名たちが嚴重に陣を張つていながら、いく

ら原ノ城が要害だとはいっても、三方から囲んでいて落せないのは、結局、味方の心が一つにならぬからだ、と水野勝成には合点が行ったらしいが、それだけに一国一城のあるじの諸將たちの心を一つにするというのは、面倒なことに違いない。

「されば」

水野勝成にうながされ、松平信綱は一膝すめると、諸將の顔を見渡した。

「総攻めは二十八日と定め、おのおの方の攻め口は、改めてお知らせ申すべし。ただし、総攻めは二十八日ということ、あと三日は固く口外ご無用のこと」

それは、將軍の命を受け上使の資格として、はつきり言ったことだけに、諸將のあいだでも押し通して問い糺して行く大名はいなかった。

「ご承知か」

信綱が念を押すと、さっきは先陣を主張していた鍋島勝茂も細川忠利も、不服そうな顔をしたが、反対するわけにも行かず、それぞれうなずいた。

「では、本日の評定はこれまで」

と信綱はいってから、改めて水野勝成に会釈をすると、
「ご老体には、大儀でござった」

「ご評定一決なれば、戦いのときは、わが子美作守におん下知を給わたりし。腹減りたる百姓たちを對手に、この老人が城攻めに加わるまでもござるまい。では、ご免」

一札して水野勝成は、松平信綱の陣屋を出ていった。

聞きようによつては、諸將の惡口をいったとも取れるし、鍋島勝茂などは、むっとした顔つきで水野勝成の後姿を睨みつけていた。

本陣を出た水野勝成は、馬に乗って水野家の陣屋へ帰っていった。

「ご苦労に存じます」

嫡男の、ことし四十歳になる美作守勝俊が出迎えて、父の馬の轡をとった。

「はてさて」

馬をおりと、勝成は、ひどく機嫌の悪い顔になって、
「松平伊豆守という人、戦いは上手ではないが、人の心をつかむこと、まことに巧みだな。あれでいうては老中は勤まるまい」

「何事かござりましたか」

「伊賀屋長八とやらいうた若い男、参っておるか」

「呼びよせましょう」

「急げ」

「はい」

美作守は、すぐに家来たちに命じた。

水野家の陣屋の隅に、住み人の避難してしまった農家があり、そこに汚ない納屋があったが、その中に長八は臥ていた。

あの夜、小舟から海へ飛び込んだ長八は、海に隠れてい

た岩に胸を打ち、半死半生のままで岸に泳ぎついた。

そこは、細川家の仕寄場からもはなれた海岸であり、寄手の石谷十歳の手の者に救われた長八は、

「水野様に入りの飛脚屋でございます」

といったので、そのまま水野家の陣屋に運ばれてきた。

ほとんど丸一日、長八は意識がなく、ようやく我に返った。

正気を取り戻したとき、まず長八が水野家の侍たちに訊いたのは、由之助とあの秋と偽名を使っていた娘のことであつた。

しかし、三人は、それぞれ小舟から海の中へほうり出されたとき、あの娘の行方はわからなくなっている。由之助だけが、ようやく細川家の仕寄場近くへ泳ぎつき、助けられた、と長八は水野家の侍に聞かされた。

どうやって原ノ城から脱出したのか、と長八は、水野家の侍大将に訊かれたが、

「それは、われら忍びの者が救い出しに参ってくれたのでござります。秋と申すあの娘も一緒にございましたが、あの娘の行方だけがわかりませぬ」

と答えて、城内の要害について問われると、土牢の中に閉じ込められていたので何も見なかった、といった。

だが、飛脚屋として戦場に來ていても、長八が伊賀者だとわかつてるだけに、水野家でも長八を大切に、陣屋の外へ出さぬようにした。それは、美作守勝俊の命令らしく、本多太郎左衛門たち公儀の伊賀組とはべつに、長八

を水野家で使おうという肚があるからに違いない。もちろん長八にも、それは察しがついたが、海中の岩で胸を打った痛みもあるし、まだ自由には身体が動かないので、水野家の陣を出て本多太郎左衛門たちに見つかり、また面倒を起すよりもいい、と考え、じっとしたまま待っていた。

今まで原ノ城へ入った伊賀者や甲賀者は、一人も生きて寄手の陣屋へ戻ってきた者はいない。

おそらく美作守としては、長八が城の要害をその眼で見ている、とわかつてるのであろう。

長八の寝ている納屋の外には、絶えず見張りの侍が二人ぐらいずつ立っていたし、毎日、水野家の医者、長八を診にきてくれた。胸の骨はどうもなっていないが、ひどく岩に打つかったので、まだ胸のあたりが腫れ上っている。息をするたびにそこが痛んだ。

「伊賀屋長八」

納屋へ水野家の侍が入ってきたとき、長八は、薄い夜具の上に半身を起していた。

水野家のあるじ日向守勝成が戦場へ到着してから、この陣屋も活気が増して、人の出入りも多くなっている。今日は松平伊豆守の陣屋へ寄手の諸将が集められ、評定が開かれた、と長八も聞いた。

「ご用でござりますか」

「殿のお召しだ」

それは水野家の徒士頭で、矢板民部という侍であつた。

「いそいで鬘を剃れ。身なりは、そのままよい」
「はい」

日向守勝成には、まだ目通りをしたことはないが、自分を呼んでいるというのであれば、どんな用件か、長八にも見当はついた。

「はい、ただいま」

長八は、手早く身づくろいをし、自分で月代や鬘を剃りながら考えた。

今日の戦さ評定の結果、日向守勝成は、自分で長八から原ノ城の要害について訊き出すつもりではあるまいか。對手は戦場往来の数を経た老将だけに、よほど受け答えに氣をつけねば、と長八は自分に言い聞かせた。

「お供をいたします」

筒袖の着物に膝付袴、脇指を帯びた姿で、長八は、矢板民部に続いて納屋を出た。

髪は結び直す間がないので、束ねてうしろへ垂れたきりであった。

日向守の本陣といつても、農家の中に帳幕を張りめぐらせたきりで、忙しく鎧武者が出入りをしている。

「伊賀屋長八、召し連れしました」

薄暗い土間へ入って、民部が一礼すると、

「これへ。人払いを」

すぐに家の中から声がした。

長八は、民部にうながされ、土間へ入った。

正面の床几に、髪の高い、陣羽織を着た、赤ら顔の武将が腰をかけている。それが日向守勝成、と長八にはわかった。

その横に、やはり床几にかけて、嫡男の美作守勝俊が控えている。

ほかには水野家の重臣が二人、立っているきりで、侍たちは縁側から外へ出ていった。

「直答を許す。あがれ」

と美作守は、顎をしゃくった。

土間からあがって長八は、ていねいに一礼して坐った。ぎらっと底光りのする眼で、日向守勝成は、長八を見ている。

これまで長八は、美作守には二度ほど遠くから黙礼をしたことがあるので、向うも長八の顔を知っているらしい。

「公儀お使番松平甚三郎どのの手の者として、九州に差しつかわされたる伊賀屋長八にござります」

と美作守は、父のほうを向いて、

「原ノ城にとりことなり、仲間の者たちの助けを得て脱け出て参りましたなれど、その仲間の者たちの名も申さず、城の要害については一切、見聞きせぬ、と言ひ張ります」

「聞いた」

太い声で日向守は、押えるようにいつてから、

「伊賀屋長八、そのほうを生かすも殺すも、われらの考え一つ、と存じておろうな」

ぎょろりと眼を光らせ、長八を睨みつけた。

ゆっくりと顔を上げると、長八は、美作守へ膝を向けて、

「直答をお許し下さりましょうや」

「許す、といった言葉、聞えなかったか」

「お大名の前へ出ますと、身もすくみ、耳も遠くなりま
する」

「こやつが」

日向守は笑った。

「そのほうがごと、松平甚三郎どのより聞いておる。空と
ほけても無益ぞ」

「いえ、何も空とほけてはおりませぬが」

「そのほう、原ノ城二の丸うちの土牢に閉じ込められてい
た、と申したそうだな」

「さようござります」

「その土牢は、二の丸のどのあたりにあったぞ」

「さあ、暗いときに入れられました上、そのまま外を見る
ことも許されず、今日は首を刎ねられるか、明日はいのち
の終りか、と思うばかりにて、城から出されたのも夜でこ
ざりましたゆえ」

「米十俵と引き換えであったそうだな」

「はい、仲間の忍びの者たちが、さよう計らってください
まし
た」

長八は、由之助の名は口に出していない。あの娘が自分
を助けようとしてくれたことにもせよ、米は河合屋から出

ているのだし、それが明らかになれば河合屋が迷惑を蒙る
ばかりか、寄手を裏切つて城方へ米を運び入れたことにな
り、罪になるかも知れない。

せっかく船問屋の女あるじとして、この天草の戦場へき
て働いている河合又五郎の妹に、長八は、そういう憂目を見
せたくない、と思つたし、由之助のほうは勘定すくでも、
危険な海を城へ近づいて自分を助けてくれたことには報い
なくてはならぬ、と考えたからであつた。

「ふむ」

水野日向守は、大きな眼で長八を見ていたが、含み笑
いをすると、

「原ノ城の要害について、そのほうの眼にしたことを隠さ
ず申し立てれば、恩賞だけではない、そのほうの出世にも
なるのだぞよ」

「お言葉をお返し申し上げます」

きちんと坐つたまま、長八はまた一礼して、

「わたくしは、お使番松平甚三郎様の仰せを蒙り、この天草
へ参りましたが、それも飛脚屋としてお役に立ちたいから
でござりました。しかし、これまで飛脚屋としては何のお
役にも立たず、忍びの者としても、敵方に捕えられたので
ございますゆえ、面目もないことに存じております」

「言葉をほかへ逸らすな」

「と、仰せありますと」

「そのほう、原ノ城の要害をその眼で見てきたに違いない」

「いえ、ただいまもお答え仕ったる通り」

「隠すな」

日向守の声は低い、眼が陰しくなった。

「城方にも、寄手に心をよせ、寝返りを打つ者が出て参つておる」

「はい、南蛮絵師の山田なにがしとやら申す男とは、暗い中で会いました」

「その男から、寄手へ矢文がきておるぞ」

「矢文が」

「寄手の忍者のうち、一人だけ無事に城を脱け出た、と書いてある。その者は、二の丸の要害を確かに見とどけているゆえ、寄手の攻め口を案内出来よう、とあった。その者とは、伊賀屋長八、おのれ以外にはない」

無言で長八は、日向守の顔を見ていた。

「矢文が」

つぶやいて長八は、にこりと笑った。

「おのれのいのち助けたさに、城方の裏切者が、何を矢文に書きましたものやら」

その笑いを日向守は、大名の自分の前を憚らず無礼な、と受取つたに違いない。

「その矢文に書いてあること、嘘だと申すのだな」

日向守の声が、荒々しくなった。

そばにいた美作守は、言葉添えようとしたが、日向守は、床几から身を乗り出して、

「この陣屋に寝泊りしたる縁も忘れ、おのれは、わしに隠してをするのか。原ノ城にて拷問を受けたこともない、というのだな」

「お言葉ではござりますが」

ここまで押問答が面倒になつてくると、長八も度胸を据えて答えた。

「たとえ、どのような拷問を受けても、忍びの業にて鍛えたる身体には、それほどこたえぬものでござります。ただ、傷あとは残りますが、ごらんに入れましようか」

「見せい」

意地になつたらしく、日向守は、押しかぶせるようにいつた。

「無礼とは存じまするが」

長八は、美作守にも一礼して、すつと両肌を脱いだ。

息をのみ、日向守と美作守の父子は、長八の身体を見ている。

そう肉のついた身体ではないが、骨は太く、よくしまった長八の上半身の胸のあたりに、火箸を押しつけたと見える火傷のあとが数筋残っている。そればかりではなく、長八が背中を向けると、太い竹で殴りつけられたのであろう、大きく腫れ上っているのが何カ所も無残に眼についた。

美作守は視線を逸らせたが、日向守は、肌を入れた長八を睨みつけたままだった。

「普通の人間なれば、これだけで半死半生の有様になりま